

夏の日長も冬の夜も

足にひまなきくるしみな。

母は水仕にやつれては

日毎夜ごとに世渡りの

からきに泣くも知らずして

こま竹馬とうかれつゝ

富貴にほこる人の子の

すがたを見つゝ羨みて

われにもかくとうなる子の

せがむ心ぞいぢらしき。

はぐゝむ親はありながら

うゑに泣かするみどり子の

れ入りし顔をながめても

つらきは人の世なりけり

昨日はことに紛らして

かへしやりたる市人の

今日を限りとはたらむを

如何にいひときかへすべき。

しばし浮世をよそにして

ねむらむものとまどるめば

夢のうちにもからき世の

はかなき影ぞうつりぬる。

ましてや雪の今夜など

親は子を抱き子は親に

いだかれつゝもたへかぬる

さむきふすまになきぬらん。

* * * * *

あはれたへなる六の花

浮世の塵は清めずも

飢寒になやむ世の人の

心痛ますなとこしへに。



アメリカのうらだな

朝露生

うらだなとは云へど四階立ての借家、千弗や二千

弗は銀行にあづけて置くのですが、悲しやこの國

にてはかくてもジャップの九尺二間、人なみの交

際もできず、その日その日の業務を漸く滞りなく

すましてゆかるゝに過ぎぬ身の上、この間に何等の詩材も何等の雅趣もありませぬ。

されど向ふ三軒兩隣り、悉く白人である中に、吾は日本のつぼすみれ、今に見よ自動車を駆りて公園の中に縦横にゆき、する身ぞと、意氣中々可愛いではありませぬか。知れる一家を材料として拙き筆を弄するにいたりましたのは、異邦にさけるこの一野艸も、花あり葉ありまた風情あり、その異彩ある家庭のありさまを讀者に告げまいらせたいばかりであります。

父君起さるのだよ、御前はまだ寐臺に居れ、オ、善良女兒々々々と云ふて居るうちに、母君のそばにて泣く子、搖籃の中にて菓物々々とさげぶ子、三界の首枷は悉く女兒にて、ふる里にて云ふなる簞笥盜賊、たのしくてまた苦しきゆく末も、わが

ものと思へば軽く身も動き、夫はほど近き店にて終日のはたらき、妻は下宿屋の主婦とも料理番と

も、また小使ともなりて、雲にそびゆる舊教の寺塔より響さわたる鐘によび起され、次の街の音楽堂の音のやみしころ、漸く室に鍵をとぎし、一年のながさも夢の間に過ぎて、ことしは六回目の新年をこの國に迎へしとか。

朝飯の仕度できしころは、三人のいとし子にもそれそれ衣裳をつけてやり、うしろにかくるボタンいくつ、靴下よ靴よと乳粥のさめぬ間の、早業長女は七才の可愛き足どりにて四階までのぼりゆき、室々の前を鈴をふりてかへり来る役、あとの二人は伯父さんよ伯父さんよとて、誰かれの厭なくかんとぶして喜ぶあどけなさ、こればかりは浮世の商人の企で及ばざる景物、情愛といふものに飢えつ

ある同胞はこの宿にきてはじめて家らしき感あることのでございませう。

朝飯のあとかたづけも慣れたることゝて、またいくうちにすまし、メーキベッドヤ部屋の掃持、洋燈の世話まで滞りなく、晝の仕度の前にと洗濯ものに手をかけて、いそがしげに働くは子だちの所謂マ、ア、まどごしに隣れる碧眼の女とかたる言葉、ペンもつことは知らぬ身も、耳にて學べる音調だしく、はんに手あなた、毎日いそがしく、子だちは世話ばかりやかして、何のたのしみもありません子。芝居ですか。先月一度ゆつて見ましたが、面白ふでござんしたよ。子だちをねかしてソツトゆつたもんですから氣がゝりで腰が落つきませんでした。今日は鬘斗ですか。わたしは洗濯よ。男の子なら世話がやけぬが、女の子は殆んど毎日洗

濯してやらねばならず、子どものうちからオシャレを習はせるやうなものです子ハ、ヲホ、ハ、ハ、と鸚鵡の舌のはこび面白く井戸端會議にあらで窓端會議がはじまりし時、俄然子どもの泣く聲、シヤポンの泡を拭ひもあへず手をふりて階段に出づれば、マンマー、あのボーイはミーをぶつたよとてまたなく。さうか悪いボーイだ。御前は日本のガールだよ、あんな毛塘に意地目られてたまるものか、オー、ノーデイボーイ、覺えて居れとさけんで見ても、影も形も見へず、泣く子をすかして戸をとぞせば、ステツプの下からノコノコいで來るノーデー先生、戸のそばにてアカンベイ。今日は不思議に三人とも仲よくて、喧嘩もせずに遊んで居ると見れば、其筈、一人泣いてきた御影にてあとの二人も落花生の御相伴、たべたあとは

まゝごと可笑しく、空箱を椅子として長女はマン
 マー、三女はベビー、そこのテーブルをそのまゝ
 ミシンとして瓜音にてカチカチやつて居るとき、
 戸を叩くは二女、入来といふて立ちあがるは小
 なるマンマア、ホロー、ハローと云ふて手を握る
 ところ、流石にこの地に育ちし者の如し、されど
 客は話の種ももたず主人は外の挨拶も知らねば、
 バイバイ、バイバイと云ふて辭し去るのみです。
 午飯もすみ晚餐近くなれば 歸り来るババア、バ
 バアよ、ババアよとて右から左から、また前から
 すがられて、苦勞の塵も殘なく落ち、バナ、に珈
 琲に一家笑ひ興するところ、こゝが生命の源でござ
 いますせう。

はじめ夫婦のこの國に來りしときは、男は遠きフ
 レスノの農園に働き、女は所謂毛唐の家の下婢と

なり、朝より夜までこきつかはれ、一年ばかりの
 間泣いて枕につかぬことはなかつたが、何日とし
 もなくそこにも慣れて、農園働きを資本とし、さ
 ゝやかなる店を開き、その利益にて下宿屋をはじ
 め、今では毎月七十弗の借家料を拂ふのみか、小
 道具の類日に月に殖えて、子だちの日曜着物も余
 り恥かしからず、貯金も子だちの身の丈と共に月
 々にのびゆくとのこと、故郷に錦をかざるもこの
 二三年のうちなるべしと、同胞間の噂とりどりで
 ございます。

アメリカの裏店も大八州の國にかへりては、中産
 以上の生活、呉竹の雪に折れふす心だになくば、
 しばらく家庭をアメリカにうつすもまた一興でござ
 いますせう。いくら働いても金の儲からぬところ
 に居て、ひつかしき姑さんの御機嫌をとるより、こ

の國にての難行苦行、山吹の花さく春にかへりきては姑さんもホクホク喜びて一家とこととはに雨もなくまた風もなくサンニイステートと自慢する加洲の天地と等しくなるでございませう。

裏店の紹介かくの如しだとサ。日の本ならばアバヨと云ふべきところ、この半熟のジャップガールをまねてバイバイ。

(完)

幼稚園と家庭

幼稚園から家庭へ望むこと

東基吉述

附添人送り迎へ人のこと

附屬幼稚園では時々先生方から附添人を集めて、子供の躰けや取扱ひ方に付いての大體を話す様になつて居りますが、これは至極結構な事と思ひま

す。今日で下婢や子守りが教育の考のない事は普通です。今日で下婢や子守りが教育の考のない事は普通のですから、彼等のために、折角幼稚園での心盡しの躰け方も丸で水泡になつてしまふことのあるのは、悲しむべきことであります。家庭の方でも、此點に心を用ゐられて、時々子供の教育上注意すべきことなぞに付きて、下婢や小守りに教訓せられるといふ様になさるなら、幼児教育上誠に都合のよい事と存じます。そしてこの事は、たい自分達の子供の爲のみならず、一方には又傭人の教育といふ點から、實に彼等の將來の幸福の一つとなる事なのであります。

夫から送り迎へによこす人は、丸で子供同様な不注意な小僧や小守りでは、別項記載の様な危険を避けさせるなどいふ事も覺束ないのでから、なるべく譯の分つた確りした人をふよこしになること